

「瀬戸内国際芸術祭 2016」における大型野外彫刻作品制作プロジェクト

報告：伊東敏光 資料作成：土井満治

研究代表者：芸術学部教授 伊東敏光

研究分担者：芸術学部長 南昌伸／芸術学部教授 チャールズ・ウォーゼン／芸術学部非常勤特任教員 土井満治／
芸術学部非常勤助教 久保寛子、呉青峰、平岡勇樹／芸術学部協力研究員 吉田夏奈

参加学生：47名(芸術40、情報4、国際1、留学生2)

本研究グループは、2015年の秋から香川県小豆島町と連携して本研究の準備を進め、2016年8月、9月の約2ヶ月間、芸術学部教員と学生が小豆島町神浦地区で滞在し、地域住民と協働しながら、大型のパブリック彫刻(高さ9m、幅7.5m、奥行14m)「潮耳荘」の制作をおこなった。作品は「瀬戸内国際芸術祭2016」の秋会期(10月8日～11月6日)で公開し、会期終了後も小豆島町神浦地区において、継続的に展示公開している。

「潮耳荘」の制作には、教員7名(内非常勤助教3名)、協力研究員1名(小豆島在住作家)、学生47名(大学院彫刻専攻5名／学部彫刻専攻16名／デザイン工芸学科13名／日本画専攻5名／油絵専攻1名／情報科学部4名／国際学部1名／留学生2名)が参加し、2ヶ月間で制作に携わった教員と学生の延べ人数は約400人に上った。瀬戸内国際芸術祭の開催期間中の来場者は、秋会期の30日間で、約7000人であったとの報告を受けている。

広島市立大学芸術学部彫刻研究室の本研究グループは、2014年から香川県小豆島町と連携し、島の南端に位置する三都半島地域を中心に、瀬戸内海の過疎地域の活性化と若いアーティストの育成を目的として、「三都半島アートプロジェクト」を企画・運営している。芸術を介した地域社会との交流を図り、小豆島町の三都半島地域の持つ風土に根ざした作品の制作を行かない、2014年に「三都半島 AP 2014 ー海のたどえー」、2015年「三都半島 AP 2015 ー潮耳荘ー」を開催後、2016年には「瀬戸内国際芸術祭2016」に広島市立大学芸術学部有志で公式参加し、計9点の作品を制作・展示した。

瀬戸内国際芸術祭は、高齢化や過疎化が進む瀬戸内海の島々を地域の貴重な資源と捉え、芸術によって活性化させる取り組みであり、2016年には春、夏、秋の3会期で観客動員数104万人、経済波及効果139億円に上っている。こうした芸術を観光振興や地域活性化に活かしていく取り組みは、地域独自の伝統や文化、風習といった特性の再認識や既存資源の再発見に繋がるとともに、なによりも地域住民が地域に対して誇りを取り戻す契機を生み出しており、アートやデザインによる地域課題の創造的な解決が国内外で期待されている。瀬戸内海の島々はまさにその中心であり、現在進行形の実験の場でもある。

本研究では地域社会との交流、リサーチ、滞在制作などを通して、小豆島、三都半島という地域の持つ歴史や地勢に根ざしたアートプロジェクトを継続的に展開することで、地域社会に生きる人々の視点と、外部からの来訪者の視点を相互に交差させながらアートを通じて地域に内在する魅力と可能性を再発見していくことを目的としている。またこれらの取り組みを通して、高度な応用力をもった若手芸術家の育成を目指している。

特に、本研究の中心である「潮耳荘」の制作では、このアートプロジェクトの象徴、基軸となるべき大型野外作品制作を通して、こ

れまでにない造形的な展開と、地域との交流拠点を作り上げることで、アートと地域社会の新しい結びつきのあり方を、作品制作と「瀬戸内国際芸術祭2016」での展示を通して実践した。

「瀬戸内国際芸術祭 2016」作品 No.89 :「潮耳荘」制作記録



【図1】

タイトル「潮耳荘」

制作：伊東敏光+康夏奈(吉田夏奈)

+広島市立大学芸術学部有志

公開：瀬戸内国際芸術祭 2016

【秋会期】2016年10月8日～11月6日

場所：小豆島町神浦地区 皇子神社前空き地。

制作期間：約5ヶ月

「潮耳荘」は、海辺にそびえる高さ9m、幅14mの大小2つのドームが連なった形状の作品で、小豆島で解体された家屋の古材を集積して作られている。波の音を集めるための大きな集音器を持ち、作品の内部に入ることが出来る。

< 2016年7月中旬 >

基礎及び鉄骨構造の設置作業

基礎にコンクリートブロックを埋設し、構造を支えるH鋼の骨組みを設置する。H鋼高さ約5.5m。



[図 2]



[図 3]

H鋼上部を連結するための鉄製リングをクレーンで吊り上げ、仮設置したのち、アーク溶接でリングとH鋼を結合する。

現地での作業と並行して、屋根部の鉄骨構造を制作。



[図 4]



[図 5]

< 2016年8月初旬 >

教員、学生らによる作品材料の製材作業

作品の主材料となる木材は、小豆島内で解体された家屋の柱や梁を再利用するので、まずは釘抜き作業から始める。体感的には一つの材につき平均10本以上の釘が使われており、素直に抜けない釘も多く、非常に時間と労力がかかる。



[図 6]

潮耳荘を設置する三都半島神浦は美しい海に囲まれている。



[図 7]

制作の休憩中、地元の方たちと地引網を行った。



[図 8]

本体の鉄骨に木材を固定していく作業。H 鋼と木の接続が難航。当初はボルトを溶接して木をそのボルトに差し込む予定であったが、メッキ 8 番線による結束に切り替えた。



[図 9]

< 8 月初旬 >

大学で組み上げた屋根部の鉄骨に木材を取り付け漆喰を塗る。



[図 10]

< 8 月下旬 >

パイプ部の制作風景

潮耳荘集音器部は、大学の工房にてデザイン工芸学科金属造形領域教員の指導のもと、学生らが協力して、集音器部の制作を行った。鉄角パイプをベンダーで曲げフレームとし、銅板を銅リベットで貼り付ける。



[図 11]

< 9 月初旬 >

完成した集音器を小豆島に輸送し、クレーンにて設置する。基礎として約 1 トンのコンクリートブロックを埋設し、コンクリート用アンカーで作品を固定する。パイプ部は 200 Φ のフレキシブルアルミダクトを基部として、表面に FRP を張り込み、砂地肌の塗装仕上げとした。



[図 12]



[図 13]

屋根部の設置

完成した屋根部を大型クレーンで吊り上げ、設置する。解体時を考慮して、屋根部と本体との接合はボルトナットでおこなう。



[図 14]



[図 15]



[図 16]

<9月下旬>

作品外観がほぼ完成した。使用した木材は推定で2メートル材2000本以上になる。



[図 17]

内部空間

垂直方向に木材を組んだ内部は、木材の隙間から光が差し込んでいる。



[図 18]



[図 19]

海岸に面した外部に突き出したラッパ状の集音器から、内部にある2つのスピーカー状の穴に音が伝わり、視覚的には見えない波や風の音が内部に響いている。

研究を終えて

小豆島の中でも、特に高齢化や過疎化が進む三都半島地域をアートの力で活性化しようとする取り組みには、その方向性や可能性を示す象徴的な作品の存在が必要であった。しかしながらその実現のためには、建造物を長期的に設置する場所の確保、制作費、管理体制等の様々な条件をクリアして行かなければならず、また、完成した作品が訪れる人々に芸術的な刺激や感動を与え、地域の方々から受け入れられ愛される存在でなければならなかった。

本研究グループは、2014年の春からのこの地域でアート活動を行い、制作と展示を通じて地域との交流や協働を経験して来た。そして「瀬戸内国際芸術祭2016」という自治体にとっても、美術家である我々研究グループにとっても発信力と集客という面で大きなメリットのある展覧会に参加する機会を得たことによって、実現することができたのである。

作品の構想段階で重要な要素は、地域の歴史と地勢であった。三都半島は、三方を瀬戸内海に囲まれた平地がほとんどない半島であり、それぞれの集落は海路で外界と繋がって来た。人々の暮らしは海と切り離しては成り立たず、現在でも特に神浦地区では、亀山八幡宮例大祭での勇壮な伝統行事「オシコミ」の際には太鼓台を網船に乗せて奉納するように、日常の生活は海とともにあった。芸術祭でこの土地を訪れる者にとっても、三都半島の地勢は変わらず、地域の持つ歴史、伝統、文化を感じることが出来る。

「潮耳荘」を設置する場所は神浦地区で信仰を集める皇子神社の社叢のすぐ近くの、コンクリートの塀を跨いだ場所を候補地とし、町から土地の持ち主に設置をお願いをしてもらった。以前は畑であったというその土地は、持ち主が東京に移住し永く放置されていたため、原野のような状態であったが、地域の方々総出で木を切り草を刈って整備してくれた。

作品のコンセプトは「音」。三都半島の集落はほとんどが海岸沿いにあり、潮の干満や波風によって海からの独特の音が聞こえてくる。古くからこの場所で暮らした人々が聞いていたであろう海の音に耳を澄ませることで、現代の生活で忘れがちな自然と人間との営みに耳を傾ける機会を生み出すことを意図した。展覧会がはじまると作品のコンセプトとは裏腹に「潮耳荘」の画像がSNSで伝わり、多くの鑑賞者が訪れた。視覚情報中心の現代らしい現象であったが、その映像を介して多くの人に海の音を聞く機会を提供出来た。

「瀬戸内国際芸術祭2016」終了後も、本研究グループと地域の方々との関係は良好である。我々研究グループからは作品とそのコンセプトを、地域からは制作協力と来場者へのおもてなしが提供され、互いに必要とし合う関係が築かれている。芸術の歴史を振り返ると、その大半は芸術家と金銭的に豊かな支援者（パトロン）との関係で成り立ってきた。しかし地域展開型の芸術活動では、支援

よりも相互協力、協働による芸術作品の制作とその環境づくりが重要となる。

今日、多くの芸術系大学が存在し、多くの学生が社会人として芸術活動を続けたいと願っている。また一方で、グローバル化が進む社会は地域独自の豊かな文化を求めている。そのような背景を持つ現代社会において、芸術による地域活性化は人々の暮らしを豊かにするために有効な手段として大きな可能性を示し、芸術と社会の関係は「地域展開型芸術プロジェクト」という新たな社会活動のフィールドを獲得しつつある。本研究によって、三都半島地域におけるアートと住民の距離は縮まり地域活性化は前進した。今後、さらに地域振興を進めるためには、芸術家の想像力と地域の潜在的資源を生かした様々な活動を展開していかなければならない。今後も我々研究グループは、地域の方々との協働による「三都半島アートプロジェクト」を継続し、他の地域でも展開可能な新しいパブリックアートの姿を実践を通して研究し、提案して行く。